



(アゴラ)
アゴラとはギリシア語で「人の集まり」を意味する。

特集 『学生討論会』

—学生の意見が反映される大学を目指して—



『学生討論会』(平成16年6月29日)

主催：大学教育総合センター・教授方法改善専門委員会

目 次

| | | | |
|---|---------------------|------------|----|
| 「特集にあたって」..... | 大学教育総合センター主任 | 田畑 博敏..... | 1 |
| 「学生の意見が反映される大学を目指して」... | 大学教育総合センター長 | 清水 克哉..... | 2 |
| 「学生討論会を開催して」..... | 教授方法改善専門委員会委員長 | 細井 由彦..... | 6 |
| 「学生参画型大学運営をめざして」..... | 鳥取大学教育担当理事 | 重政 好弘..... | 7 |
| 「大学と教育」..... | 教育地域科学部人間文化課程(02入学) | 坪井 公子..... | 9 |
| 「『学生討論会 - 学生の意見が反映される 大学を目指して - 』に参加して」... | 医学部生命科学科(04入学) | 久保 悠介..... | 10 |
| 「学生討論会に参加して」..... | 農学部獣医学科(00入学) | 遠藤なつ美..... | 12 |
| 「鳥取大学の全構成員の協力で より良い教育の実現を」..... | 医学部医学科(97入学) | 高橋 賢史..... | 13 |
| 大学教育総合センター主催の講義等の記録..... | | | 16 |
| トピックス 「ドイツ企業研修の報告」 | 教育地域科学部人間文化課程(02入学) | 小椋 章嗣..... | 22 |
| シリーズ - 絵を描く(2) | 地域学部教授 | 上田 敏和..... | 24 |

学生討論会

—学生の意見が反映される大学を目指して—

- **目的:** 授業について、その問題点などを学生と教員が議論することにより、学生の意見を授業に反映させ、授業の質の向上を図る。
- **日時:** 平成16年6月29日(火) 午後4:45～
- **場所:**

| | |
|---|---------------------|
| [| 鳥取地区: 共通教育棟 208 講義室 |
| | 米子地区: 医学部基礎第1 講義室 |
- **主催:** 大学教育総合センター、教授方法改善専門委員会

学生、教員の皆さん、ぜひご参加下さい。

討論内容

授業評価、シラバスについて
定期試験、成績評価(GPA)について
全学共通教育について
— 大学入門科目
— 主題科目
— 実践科目
— 専門基礎科目
専門科目について
その他



大学教育総合センター
支援課 共通教育係(内線: 2432)、教務支援係(内線: 2430)



特集にあたって

大学教育総合センター主任 田 畑 博 敏

本特集では、平成16年6月29日に開かれた「学生討論会」を主要テーマにとりあげます。この討論会は、「学生の意見が反映される大学を目指して」、大学教育総合センターと教育支援委員会・教授方法改善専門委員会との合同主催により、鳥取と米子の両キャンパスを同時中継して行われました。両会場には、合わせて約200名の学生・教職員が出席して、熱っぽい雰囲気の中で、質疑・応答がなされました。取り上げられた問題やテーマも多岐にわたります。全般的論点として、授業評価、シラバス、定期試験、成績評価（GPA）などについて、教員サイドから、問題点の指摘や改善のための活動報告がなされました。それに対して、学生サイドからは、さまざまな不満や要望や提案が出されました。これらの意見のうち、その場で改善の方策が約束されたものもありましたが、今後解決されるべき課題として残されたものもありました。さらに、全学共通教育の具体的なカリキュラム項目（大学入門ゼミ、主題科目など）についても、その持つ問題点や、改善すべき事柄が検討されました。最後に、この「学生討論会」そのものについてのアンケートが実施されて、閉会となりました。

本年4月から本学も法人化され、より一層学びがいのある大学を目指して、さまざまな「大学改革」が進行しています。その中でも、「授業改善」は、本学全体が取り組むべき重要課題とされています。そのために、上記の「学生討論会」は、「授業の問題点などを学生が議論することにより、学生の意見を授業に反映させ、授業の質の向上を図る」ことを目的に、企画・実施されました。しかも、これは今回が全く初めての討論会です。

そういうわけで、この最初の「学生討論会」に出席された教員と学生の方々の意見や感想を中心に、本特集を組みました。また、本特集を資料としても活用できるように、討論会当日に出された意見やアンケート結果を集約したものを掲載します。本特集が、最初の「学生討論会」を記録し、広報することで、今後このような討論会のあり方を検討する参考資料となり、ひいては授業改善に貢献することになることを願っています。



学生の意見が反映される 大学を目指して

大学教育総合センター長 清 水 克 哉

鳥取大学は、平成16年度から法人化されて、国立大学法人「鳥取大学」として中期計画・目標に基づいて、種々の業務を遂行していくこととなった。教育に関しても数多くの中期計画・目標が組み込まれ、その中の一つに「大学教育の改善の核として教育目的・目標に即した教育課程の見直しを行い、授業評価等を生かした授業実施体制を組み、それとともにFD活動及び自己点検・評価を積極的に推進するために大学教育総合センターを活用する。」という目標が設定されている。大学教育の改善のための教育課程の見直しについては、大学教育総合センターと各学部の教育担当の副学部長等のメンバーで作業部会を設置して現状の問題点を検討中である。

本学では、いくつかの大学で採択されている学生参画が実現できていないという状況にあり、学生からの意見や要望等がまだまだ大学教育の中に反映されていないという指摘がなされている。現在、多くの大学で、学生による授業評価を活用することによって、大学教育の改善を図るという試みが実行されているが、この授業評価の活用によって一定の成果は上がっているものの、現行の授業評価は、あらかじめ用意された設問に答えるアンケート調査であり、学生の生の声が届きにくいという欠点を有している。

鳥取大学では、数年前から新生を対象とした学長との懇談会が毎年行われており、教育活動等に関する学生の意見や要望等が提示され、その懇談会で問題点として取り上げられた項目のうち、早急に改善が必要であると学長が判断された点については、問題解決のための対応策が講じられ、すみやかに実行されている。また、大学入門ゼミの合宿研修や今年から始まった朝食会など、新生には自分の意見や要望等を述べる機会が設けられているのに対し、2回生以上の学生が不満や要望を表明するチャンスは、ほとんど無かったのが実情である。それらの点を考慮して、今回は、教育担当理事をはじめ各部局の副学部長等に参加していただく形の本学初の全学生を対象とした「学生討論会」が企画・実施された。大学運営等への学生参画が模索されつつある今日において、本学で多数の学生の意見や要望等を聞く「学生討論会」が開催されたことは、学生参画型大学へ一歩踏み出した証であり、学生の意見が反映される大学への貴重なステップであったと考えている。

大学教育総合センターでは、平成15年度の後期に「学生討論会」を実行する予定であったが、諸事情により計画倒れに終わってしまった。そのような経緯もあって、本年兼ねてからの懸案であった「学生討論会」が実現できたことは、開催側の人間として喜ばしい限りである。しかしながら、今回の学生討論会を開催するに当たって、一番気にかかったのは、果たして学生

諸君が意欲的に参加してくれるのかどうかという点であった。現行の大学教育に対する不満や要望はあっても、いざとなると「面倒臭い」的な発想で期待したような人数が集まらないという例はこれまでも数多くみられている。現代の学生気質は、そんなものであるという割り切った考え方もあろうが、関係者としては何とかこの討論会を成功させて今後の本学の教育の活性化を図りたいという思いは強かった。この討論会のねらいの一つは、学生が自分たちの意見も本気でいえば、大学側は真摯に受け入れてくれるという意識改革にあった。そのためにも、なるべく多くの学生に参加してもらい、積極的な発言を引き出すことが重要であり、その条件を整えるために、教授方法改善専門委員会から各学部へ学生動員をお願いしようということになった。幸いにも、各学部の絶大なる協力をいただき、予想以上の学生諸君が討論会に参加してくれた。しかも、こちらが考えていた以上に真剣且つ活発な意見交換が行なわれた。

今回の学生討論会で討議された主な事項は、「学生による授業評価について」、「シラバスについて」、「定期試験について」、「成績評価について」、「全学共通教育について」、「専門科目について」などであった。以下に討論会においての学生の質問・意見(Q)及び大学側の回答(A)の一部を掲載しておく。

学生による授業評価について

Q：現在の授業評価のアンケート項目は5段階だが、文科省のガイドラインは3段階であり、5段階と3段階を使い分けた方が良いと思う。

Q：アンケートを記入する時間が少なすぎるのもっと余裕を持たせて欲しい。

Q：授業評価は教員がすべきでなく、事務員で実施した方が良い。

A：具体的にどの程度手間がかかっているのか十分把握していないので調査し改善したい。

シラバスについて

Q：webシラバスに掲載している教員が少ないので全教員が掲載して欲しい。

Q：学生の勉学のために少しでも活用できる資料があれば、より多く提示して欲しい。

Q：できれば全学生に全科目のシラバスを持てるようにして欲しい。

Q：シラバスはもっと改善すべきである。

Q：シラバスに求められているのは、授業の目標の明示であり、目標とは学生の理解度の到達点であるから、その部分を書いて欲しい。今のシラバスはそこが抜けている。

A：学長、教育担当理事、大学教育総合センター長が、シラバス内容等のチェックを行っており、改善のための努力をしている。

定期試験について

Q：テストで後に座っている学生がカンニングをしているので、なんとかして欲しい。

Q：農学部ではコース分属のシステムがあるので、カンニングで高得点をとる学生がいるのは許せない。

Q：カンニング防止のための具体的な対策がなされていない。

Q：過去問題さえやれば試験に合格する科目があるので、問題を変えるなりして対応して

欲しい。

Q：定期試験の内容は、授業理解の到達を見るものとして、漠然とした問題でなく授業で教えたことが理解できているかどうかを問うものにして欲しい。

A：教員の立場からすれば、後の席はマークしているので学生は勘違いをしているのではないか。

A：過去問題については、投書でも指摘されていた課題の一つであるが、学生諸君が過去問題を十分に学習し、理解度が深まれば教育効果という点からは問題がないとも考えられる。

成績評価について

Q：レポートの提出を多く求められるが、ポイントの部分にアンダーラインなどを付して返却して欲しい。

Q：試験に不合格で再試験を受ける場合など、採点基準が開示されていないと、自分が何を理解できていなかったのか判らず、勉強ができない。

Q：採点基準や配点が開示されていないことは、本当に公平に評価されているか学生に疑問を感じさせる。

A：答案閲覧または返却については、統一的に取り扱う方向で検討したい。厳格な成績評価のためには、明確な基準を開示しなければならないと考えている。

A：シラバスにも明確な採点基準を示すなどの方法も検討していく。

全学共通教育について

Q：情報リテラシは、パソコンを理解している学生にとっては退屈で意味のない時間になってしまっている。能力別のクラスにすべきである。

Q：ある授業で教員の声が聞こえず、板書の文字も小さくて読めないという意見が多いのに、その教員に対して対応策がとられていないのはどうしてなのか。

Q：パソコンを強制的に購入させられたが、2年生になったらレポート作成程度にしか使用することがなくなっている。パソコン必携に疑問を感じる。

Q：主題科目は抽選で決められているが、選択数が少ないことなどで学びたい科目が選べない。

A：高校でも情報教育が進んでおり、「情報リテラシ」は改善していかなければならないと認識している。

A：教員の個人的な問題も大きく、大学教育総合センターとしてもできるだけ対応策は講じてきているが、十分な改善ができず苦慮しているのが実情である。

A：パソコン必携については、効果的な活用ができるようにしたいと考えている。

A：主題科目の開設数については、学生からの強い要望があり、できるだけ多くの科目が開設できるよう、創意工夫を行い要望に応えたいと考えている。

専門科目について

Q：教員が教科書をパソコンに取り込んで、パワーポイントにより授業を進める科目があ

るが、ノートを書いている途中で画面が切り替わってしまうなど、大変なので利用方法を改善して欲しい。

A：教材のパソコン利用は、良い面と悪い面があることを認識し、効果的な利用方法を検討していく必要を感じている。

以上のような意見交換が真剣に行われ、私の独り善がりかもしれないが、この討論会を実施して本当によかったと感じるとともに本学の学生の真面目さを再認識できたような気がした一日であった。そして、学生たちの真剣な要望等にはできるだけ応えなくてはならないという思いも強くした時間であった。

最近、プロ野球界で選手の要望に対して、ある有名なオーナーが「たかが選手ごときが・・・」という発言をして物議を醸したが、大学においても「たかが学生の意見・・・」というような風潮は、法人化された今でも根強く残っている現状である。鳥取大学が「素晴らしい教育を実施している大学」に変革していくためには、学生と教職員が一丸となって連携・協力体制を構築していく姿勢が必要なのではないだろうか。





学生討論会を開催して

教授方法改善専門委員会委員長 細井 由彦

6月29日に大学教育総合センターと教授方法改善専門委員会の主催で学生討論会を開催しました。当日は鳥取地区・米子地区を結んで開催し、多くの学生の参加がありました。討論会後のアンケートの結果を見ましても、討論会が必要と答えた学生が回答者の94%をしめ、討論会が有意義であったという学生は58%、討論時間が足りないという学生が49%と積極的な評価が多くなっていました。初めての試みとしてはまず成功したのではないかと思います。

教授方法改善専門委員会が取り組んでいます授業評価アンケートにつきましては、当日、アンケートの実施方法について、実施時間が短いことや実施者を教員以外にして欲しいなどの意見が出ました。アンケートの点数について、「3点は学生は『どちらともいえない』のつもりで回答しているのに、教員は『6割を満たした良い授業』と考えているのではないか。共通の認識となるようにすべきである」との意見なども出て、これまであまり考えていなかったことに気づかされました。

授業評価アンケートにつきましては教員側からも種々意見を頂いていますが、討論会参加後の学生アンケートにおいても、いくつかの意見が寄せられました。授業評価アンケート結果を活かすための実施時期や改善されない場合の対応、実施するときの教員の態度などについての意見が出ていました。また、「授業が評価を気にしすぎて画一化されるのはおもしろくない」という意見や、「大学側がいろいろ改善してくれるのはうれしいが、学生側の意識に甘えが見られる気がする。その辺の啓発もすべきではないか」という意見などもありました。

学生による授業評価アンケートを始めて以来、つねにその信頼性に対する疑問が教員側からも寄せられています。その中には、「日頃授業にまともに出ない学生にアンケートに答えさせるべきでない」とか「学生に甘い授業が評価が高くなる」などの声もあります。「日頃授業にまともに出ない学生にアンケートに答えさせるべきでない」のではなく、「日頃授業にまともに出ない学生に授業に出させてアンケートに答えさせている」方が問題なのではないかと思えますし、「学生に甘い授業が評価が高くなる」というのは少しはそのような学生がいたとしても、たいていは教員側の思い違いでしかないと思われます。それは「わかりやすい授業をめざして」と題して平成10年以来何度か開いてきたシンポジウムに招いた講師の方々の話や、アンケートに書かれている授業の不満に対する学生の意見を見れば分かります。多くの学生は授業を理解し学力をつけたいと望んでいると思えます。「少人数のクラスの方が評価平均点が高い」と言われていることも、裏返せば授業環境が整った分かりやすい授業が学生に評価されていることだと思えます。

授業評価アンケートを意味のあるものにするためには、教員と学生との間の信頼関係を築いていくことが重要であると思われます。学生は自分の努力不足を授業方法のせいにするのではなくしっかりと回答する、教員は学生の回答を真摯に受け止め改善に努力するということのキャッチボールで授業の質が高くなればと思います。そのためにも今回のような学生の声を聞く討論会は非常に重要です、教員の声を聞くような催しも行う必要があると思います。



学生参画型大学運営をめざして

鳥取大学教育担当理事 しげ まさ よし ひろ
重 政 好 弘

鳥取大学は、大学の理念に「知と実践の融合」を掲げ、共通（教養）教育充実の基に教育重視の大学を表明し、様々な角度から実践教育に積極的に取り組んでいます。

鳥取大学では教育研究目標として下記に示す3項目を掲げています。

1. 社会の中核となりうる教養豊かな人材の養成
2. 地球的・人類的・社会的課題解決への先端的研究
3. 地域社会の産業と文化等への寄与

教育面においては、「目的意識を明確にし、学習への動機づけ」を重要項目として、学長のリーダーシップのもと、教育支援委員会の下に全学的な組織網を形成し、本討論会でも話題になった以下の様々な教育プログラムを実施しています。

FD（公開授業、双方向授業）、JABEE対応教育システム、GPA導入による成績評価、学生による授業評価、ノートパソコンの必携化、地域との連携教育プログラム、教養基礎科目（協定に基づく県教委との連携：全国で初めての試み）、出前授業の高大連携、人生を語る教養特別講義、インターンシップ等々のプログラムをそれぞれの教育目標に合わせ、工夫しています。

顕著な教育効果、啓蒙効果をあげたプログラム担当者は、教育功績賞制度により、顕彰されます。本年度から、共通教育を中心とした学部教育への貢献度を教育ポイント制度により評価し、貢献度の高い教員へのインセンティブを計画しています。また、学長表彰をはじめとした様々な学生表彰制度を設け、学生諸君の学習への動機づけ効果を側面から促進しています。各学部においても学部にあわせた学生表彰制度が制定されています。

一方、平成15年度に鳥取大学から申請した「アウエアネス（自覚）を持った学生づくり教育 - フィールドに学ぶ動機づけ実践プログラム - 」が文部科学省の特色ある教育プログラムに採択されています。申請したプログラムは、農学部、工学部で行われている実践現場（フィールド）での体験、感動をもとに学生に、アウエアネスを持たせることにより、教育効果をあげてゆくプログラムで、鳥取大学でのこのプログラムの量的拡大が期待されています。鳥取大学としましても、このプログラムを多様な学生の要望に応えうる多様なフィールドを準備した鳥取大学版E-COOP(社会と大学が共同して教育にあたるプログラム)として鳥取大学の特色とすべく学長のリーダーシップのもとに推進してゆきます。いずれにいたしましても、鳥取大学の教育は卒業生への職場での評価を含む社会的評価と卒業生の母校愛、子弟等の鳥取大学への入学等に現れる学生の満足度で評価されます。そのことが、鳥取大学が存在している証となります。そのためには、「教育は教えられるものではなく学ぶものである」ことを学生諸君にしっかりと自覚（アウエアネス）していただき、学生討論会で意見を述べ、学生相談室を活用し大学運営へ積極的に参加していただくことが必要です。今回の討論会は、学生の皆さんの前向きな意見要望により、予定された時間を大幅にオーバーするもので、熱気にあふれた学生討論会となりました。このことは、鳥取大学の学生参画型運営の実現に道を開くものであります。鳥取大学は、学生諸君・卒業生の意見や要望を真摯に受け入れ、キャンパスライフを充実し、教育環境を整備することで、自らの存在意義を自他共に認めうると考えています。是非とも鳥取大学のキャンパスにおける主役は学生諸君であることを自覚、自負して、積極的に大学運営に参画していただくことを希望します。

このことを可能にするのは、教職員全員が鳥取大学運営への学生参画の良きメンターとして、学生諸氏へ対応していくことであり、この学生対応の意識、気持ち（カウンセリングマインド）は教職員にとって必要不可欠なものであります。教職員各位が「大学は教育 - Educate（教育する）の語源はEduce（引き出す） - の現場である」ことを認識し、その評価が難しい教育の価値を真摯にお考えいただき、それぞれの立場から教育へ関与している意味をご理解いただきたく思います。そのことにより、鳥取大学で働く喜び、日々学生と共にあることの幸せを教職員自身の肌で感じることの出来る鳥取大学が実現するものと思います。



大学と教育

教育地域科学部人間文化課程（'02入学）坪井 公子

先日の学生討論会を終えて、私はふと、大学1年生の時に知り合った大学教員の方の言葉を思い出していた。その言葉とは「今の大学（教員）には教育力が求められている」というものだった。正直に言うと、その言葉は当時の私にはあまりピンとくるものではなかった。何故なら、大学とは自ら学び、自ら深めるといった個々の主体性に任された場であるべきだという、「べき」論を考えていたからである。

しかし、その後、私の考え方は少しずつ変わっていく。それには増加する大学・短期大学への進学率への認識の変化があった。文部科学省のこのほどの発表によれば、この進学率は49%を超えている。

ここで、少し抽象度を上げて今や約半数までにもなった進学率を考えてみる。すると、「大学に行く（大学を出ている）こと」が求められる社会が多くあるという認識に応える形で進学率は伸び、そしてぐんぐん伸びる数字を前に更にその認識を深めるといった循環を持ってここまでの数字になったと考えてみても良いように思われてくる。そして当然、このようにして増加してきた大学生の進学に対する主体性は少なからず剥ぎ取られているものと考えられる。ならば、これからの大学教育の課題設定はこのことを踏まえて設定されなければならなくなっていると言えるのではないだろうか。

そんな中、今回行われた討論会はこのことを踏まえた地点に立ってこれからの鳥取大学における大学教育のあり方を考えようと言われたものであったように思う。「よりよい授業を目指して」と付けられた副題がそのことを十分に感じさせてくれるものだった。

この討論会ではっきり否定されたことは、ぼそぼそテキストを読んで勝手に進めていくような形で「分からなくても知らないよ」的な講義、それと「学生の主体性」を隠れ蓑にした授業だろう。幸い、私は今のところそういった授業にはめぐり合っていないが、討論中にはそのような講義に対する批判も飛び出していたことは事実である。

そしてはっきり宣言されたのは「よりよい授業」を目指した教員側の「教育力」の推進を大学側は進めますというメッセージではなかったか。

討論中、医学部の学生が「最初からやる気をなくしている学生なんて、そういない。」と発言したところ、大学側は、「授業中、寝てしまうのは授業がつまらないからだという心持で取組んでいきたい。」と答える、私にとっては衝撃的な場面があった。

大学側の本気を感じ取った瞬間だった。本気には本気で答えるべきではないだろうか。次に本気になるべき者は言うまでもない。

最後に 希望的観測として

少しも下がることのない進学率，それは何を意味しているのか。

その答えは「大学への期待」ではないのか。大学では楽しい充実した時間が送れる，そういった期待が懸けられているのではないか。だから，必死こいて受験勉強する。もちろん，そうして目指す大学への期待はそこで学べることに限らず，サークルや，友人関係にも懸けられている……。いや，正しくは もちろん，それらに向けられる期待はサークルや，友人関係に限らず，そこで学べることにも懸けられている かもしれない。

ここで，いま学問を二義的に扱ったのは先に述べた進学時の事情があるからだ。その中で，よりよい授業を目指して学生討論会というものが鳥取大学側から設けられたのは，その期待に応えようとする真摯な態度からではなかったかと思える。よりよい鳥取大学を目指しての改変が始まるのだと感じる。



『学生討論会 学生の意見が反映される 大学を目指して』に参加して

医学部生命科学科（'04入学）久保 悠 介

6月29日，「授業について，その問題点などを学生と教員が議論することにより，学生の意見を授業に反映させ，授業の向上を図る」という目的の下，大学教育総合センター・教授方法改善専門委員会の主催で，鳥取大学では初めての討論会が開催された。そこで話し合われたテーマは，授業評価の方法，シラバスの形態，成績評価，各科目の授業内容等である。

席上学生側から出された意見は，「授業の予習復習ができるようにシラバスをWeb化してほしい」「テスト・レポート等の返却をしてほしい」「アンケートの時間が最後の授業の10分間では少ない」「主題科目の抽選制はやめてもらいたい」といったものであった。また，試験時のカンニング防止を声高に訴える学生がいると思えば，「テストはやる気のある人がやればいい，カンニングするような人にはやらせておけばいい」といった対立意見が出るなど，文字通り多様な意見が飛び交った。

実は，私はこの討論会に出席するにあたり，所属する医学部生命科学科で事前にアンケートを実施していた。アンケートに回答してくれたのは，38人中12人である。これは，予告なくいきなり実施したこと，実施目的が明確になっていなかったこと，実施主体が討論会に参加する学科代表学生（私を含め2人）であり，大学教育総合センターのようなしっかりした組織ではなかったことから，仕方の無い人数であると考えられる。

アンケートに記載された主な意見としては，次のようなものがあつた。「先生がいつも授業

に遅刻する」「教授のやる気が感じられない」「シラバスの作成に専門家が携わっておらず、授業の進行が上手くいかない(これはある特定の先生の授業について書かれたものであるが、その先生ご自身も最終回の講義で「今回の授業は失敗です」とおっしゃっていた)」「声が聞こえない」「字が小さくて見えない」「黒板を向いて授業をする」「分かり易さに欠ける」「授業の完成度が低い」等である。最後の2つの意見も、ある特定の先生の授業について書かれたものであるが、アンケートの実に半分以上で同じことが記載されていた。他にも、目立って多かった意見として、「主題科目の抽選制を止めて欲しい」というものがあった。

これはあくまで、ごく少数の学生を対象にして実施したアンケートの結果である。主題科目の決定方法(抽選制)等に対する不満は、私が入学する以前からも多かったと聞いている。「こうして欲しい」「こうあるべきでは」といった要望が、他の学生のみなさんにもまだまだあるのではないだろうか。たとえ不満があって授業評価アンケートに記載する等の方法で関係者に申し立てても、明確な形でフィードバックが得られないといったこともあるのではないか。これでは学生側の意欲はますます萎えてしまうということにもなるだろう。先生方は、「現在大学が変革期を迎えている」とよくおっしゃっている。事実、4・5年前から、各大学で学生の意見を取り入れた教育改革がなされていることを耳にする。しかしながら、鳥取大学は他の大学に比して、学生側も大学側も少し取り組みが遅れているような気がしてならない。

先の討論会には、湖山キャンパスの学生120余名、米子のキャンパスの学生20余名、合計140人以上の学生が参加した。対して、壇上に座っておられる先生方は、10名に満たなかった。内容に関しても、討論会とは名ばかりで、学生の意見に対して「今改善中です」「これから取り組みます」といった返答が多く、「討論になっていない」と感じた学生も決して少なかつたのではないだろうか。

岡山大学や愛媛大学などでは、数年前から授業改善を行う学生による組織があり、学生が新しい授業を提案したり、授業評価アンケートやシラバスの作成に関わっている。他の大学で出来ることが、鳥取大学に限って出来ないということは、決してないと思う。学生と大学との間に、学生側の要望を吸い上げ、それを学生と大学とでしっかりと話し合わせ、実行へと移すといったような、そんな組織があれば学生の意識も変わってくるのではないかと思う。

「大学の変革期」に、本当の意味での「変革」を図るためには、学生・大学、双方の努力がますます必要になるということ強く感じた。

< 医学部 生命科学科 ('04入学 38人中12人回答) アンケート >

勉強それ自体について

- ・教科書を使わない
- ・教授のやる気が感じられない
- ・声が聞こえない、字が小さくて見えない、黒板を向いて授業をする

- ・分かりやすさに欠ける完成度の低い授業
- ・シラバスの製作に専門家が携わっていない
- ・先生がいつも授業に遅刻する

要望

- ・多くの知識を身につける
- ・もっと専門的なことをしたい
- ・本当の勉強の楽しさを教えてもらいたい
- ・主題科目が少ない(生命科学は3つしかない)
- ・主題科目が抽選制であるということ
- ・主題科目を受ける前に抱いていたイメージと、受け始めてからのそれが違う。シラバスは本当の授業の内容を伝える役割を果たしているのか。お試し期間が欲しい。

その他

- ・本当に学生の声は届いているの



学生討論会に参加して

農学部獣医学科('00入学) えん どう 遠 藤 み なつ美

大学の授業内容、定期試験や授業評価アンケート等について、学生と大学職員で意見交換を行う学生討論会が開かれることを知った時、最初はどんな会になるのか想像が付きませんでした。今までにも学部学科単位ですが、学生だけで話し合いを行い、意見を大学側に述べたりする場はありましたが、今回のように色々な学部の学生と大学職員が席を同じくして自由に意見を言い合える場が提供されたのは初めてだったからです。そして、これから大学が少しずつ変わっていくのかもしれないという期待と、ただ単純に他の学生や大学職員がどんなことを考えているのか聞いてみたいという衝動から、今回参加してみようと思いました。

実際参加してみて、学生、大学職員共に想像以上に参加者が多く、驚きました。きっと、この学生討論会に興味を持った人や、今まで発言する機会はなかったけれども大学に対して意見を持っていた人が多かったのだと思います。そして、会が始まると、次々と意見が飛び交い、自分も感じたことのある疑問や、このように改善したほうがよいというアイデアが提言され、他の学部や異なる学年の学生の意見を生で聴くことができ、とても新鮮に感じました。その中でも興味深かったのは、授業評価アンケートに関する議題の時です。授業評価アンケー

トは前期と後期の授業の終わりに全ての科目において提出することになっていますが、アンケート結果が本当に今後の授業に活かされているのかどうかというのが、学生から出ている大きな疑問でした。評価方法が今のマークシートの5段階評価では結果が曖昧であるとか、今年から設置された質問で学生のその授業への出席状況を問う項目はどんな意図があるのかなど、私自身いつも感じてはいたものの、あまり深く考えずにやり過ごしてきた疑問でした。また、先生からの意見で、自分の授業に対する評価を受ける側として、学生が授業評価アンケートというものをどの様に受け止めているのか聞いてみたいという意見があり、学生が自分達の評価を先生がどのように受け止めているか気がかりであるように、評価される側も同じような疑問を持っていることを初めて知りました。授業評価アンケートは授業の質を向上する目的で行われるべきもので、その目的が果たされていないのなら上手く機能しているとは言えません。今回のように、授業を受ける側、行う側、色々な立場の人が意見を交換することで、より目的にあったやり方に改善され、最終的に私たちの授業に反映されていくことが期待できます。

全体を通して、多くの人が大学のあり方について様々な意見を持っているということが分かり、今まで何も考えずにやり過ごして来た事やどうせ変わらないだろうと諦めてきた事に関して再考し納得させられる機会となりました。また、私が下級生の頃感じた記憶のある意見が下級生から発表されていることは、何年も同じような不満が解決されていないことになり、これは今まで意見を伝えてこなかったことと、意見を伝えたとしてもそれが反映されないまま放置されてきた結果だと情けない思いがしました。今回、意見を多くの人に伝えられる場が提供されたことで、私たち学生の意見が反映され大学が変わっていく可能性を感じました。



鳥取大学の全構成員の協力で より良い教育の実現を

医学部医学科（'97入学）^{たか}高 ^{はし}橋 ^{さと}賢 ^し史

はじめに

これまでも学生はより良い授業を受けたいと切実に思ってきました。良い教育を受ければそれだけより良く学ぶことができ、大学で学び得た事が社会への貢献へとつながります。大学においてより良い教育がなされることは、学生の要求と社会からの要求とが重なり合います。そしてより良い教育の模索のためには、学生と教官との相互の協力が不可欠です。今回行われた討論会は、より良い教育の模索のための第一歩となるものでしょう。この討論会

を通じて、また私が日頃感じていることをこの誌面をお借りして述べさせていただきたいと思えます。

シラバスと授業評価について

討論会に際し、私はかねてからの持論を発言しました。1つはシラバスについて、2つ目は授業評価についてです。

本来シラバスは「単なる時間割」ではなく、私たち学生がその科目1単位を学んだ後、何をどこまで出来ているのか、といった教育目標がきちんと明示されていることが何より重要であると考えます。教育目標の明示されていない授業は、ゴールを知らされていないままマラソンを始めるようなもの。そして、その目標も教育学的には原則であるRUMBA(教育目標を設定する際の5つの原則・Real Understandable Measurable Behavioral Achievableの頭文字をとってこう呼ばれる)に従い。一般目標(GIO)と行動目標(SBO:最近では個別目標と呼ばれる事も)をそれぞれ明記する必要があります。教育目標が明示される事によって、私たち学生は学ぶ動機付けが一層強まります。「シラバス不要論」が一部存在しているようですが、単なる時間割的シラバスに存在意義が薄いのであって、教育目標が明示された学習のガイドラインとして、シラバスが本来の役割を果たす必要があるのではないかと思います。そして授業評価についてですが、私は医学部では他学部とは異なる書式の評価シートを用いていることを初めて知りました。医学部の評価シートは、2001年に文部科学省より発表された教員の教育業績評価型ガイドラインを参考に作成されていますが、ガイドラインでは「評価方法にはcheck list (yes, no, どちらともいえない等の3者択一の形式)による方法とrating scale (非常によい, よい, 普通, 悪い, 非常に悪い, の5者択一等の形式)による方法があるが、適宜使い分ける。」という表記があるにもかかわらず、本学医学部の授業評価シートでは全て5者択一となっているなどの不十分な点が見受けられます。また、スケールの基準に関する捉え方の違いが学生と教官の間にあるのではないかと、という点も指摘しました。例えば、「3」という評価において、「6割を満たしているから合格点である」という捉え方と、「スケールの真ん中であり±0である」という捉え方がある、といった点です。評価の実施について、教育を受ける主体者である学生の声をより反映させながら、良い授業を正當に評価できるような授業評価の実施へ向けて、学生と教官の共通認識を広げていく必要があります。私たち学生は別に特定の教官に評価で罰を与えたいのではなく、授業の改善につながる事を望んでいます。2003年に医学部学生会で集めたアンケートでも、評価をきちんと授業改善に役立てることを望む声が多かったです。

大学自治と今回の討論会の意義

大学には、学生・教員・職員によって相互協力で大学運営を担う三者自治という原則があり

ます。これは東京大学を始め、全国の国立大学で確認がされているはずで、学生と教官が一緒になってよりよい教育を模索し合う討論会は、まさに大学の自治精神に基づくものであり、今後その重要性が一層光ってくるものであらうと思います。その実施方法については、学科規模など適当な範囲での開催の方が議論のしやすさがあると感じられました。今回の討論会の開催自体はこれからの第一歩であり、今後につながる意味で私は大きく評価したいと思います。

「教授錯覚」の克服と学生の教育への一層の積極的参加を

日本医学教育学会の学生会員となり独学で医学教育学を学び始めた頃、「教授錯覚」と呼ばれる現象を知りました。教育者が学習者を前に一所懸命講義をし、喋った事に満足し、「こっちは教えたのに何で覚えていないんだ！」という発言が出てくる現象です。教育は、教育者が一所懸命喋る事が到達すべき目標ではないはずで、学習者が理解に到達することこそが目標であり、そのための手段(授業もその1つ)をより効果的なものに改善していく必要があります。教授錯覚の克服は、学習者中心の教育を実践するためには何よりも重要な課題です。また、私たち学生自身の課題もあります。ぜひ学ぶ主体者として、(今でも頑張っていますが)より積極的な学習と教育への参加でもって、鳥取大学の教育をよりよいものへとしていく努力をしようではありませんか。

最後に、討論会を企画運営し成功へ尽力された方々と、本稿執筆を指名して頂いた清水教授にこの場を借りてお礼申し上げます。

参考文献

- 1) 吉岡昭正：医学教育の原理と進め方 医学教育マニュアル1 (日本医学教育学会編) . 篠原出版, 1978 .
- 2) 国立大学医学部長会議, 教育カリキュラムに関する小委員会, 教員の教育業績評価方法に関するワーキンググループ: 教員の教育業績評価型ガイドライン . http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/13/03/010331.htm

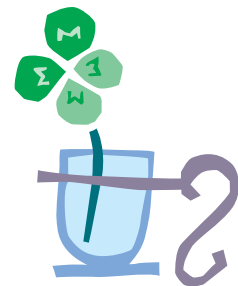
大学教育総合センター主催の講義等の記録



教養特別講義『人間文化の創造と伝達』
(平成16年9月24日～29日)



「手話の視覚映像文法」(9月28日10:30～12:00)
大学教育総合センター渡邊政憲教授



平成16年度 中国・四国地区国立大学間共同授業

| | |
|------|--|
| 授業科目 | 「世界平和を考える」 |
| 単位数 | 2単位 |
| 開設期間 | 平成16年8月9日(月)～12日(木) |
| 講義室 | 工学部大学院棟2Fゼミナール室 |
| 受講対象 | 全学部学生 |
| 参加校 | 鳥取大学・島根大学・岡山大学・広島大学・山口大学・徳島大学 香川大学・高知大学・愛媛大学・呉工業高等専門学校(以上10校) |

授業日程

| | 受付及びオリエンテーション | 各大学 |
|------|--|----------------|
| 8/9 | 講義1 『南の南』から世界平和を考える | 広島大学 小柏 葉子 助教授 |
| | 講義2.3 鳥取大学全学共通教育での平和講義の実践と課題 | 鳥取大学 一盛 真 助教授 |
| 8/10 | 講義4 国連の危機? - イラク戦争を考える - | 香川大学 湯山 智之 助教授 |
| | 講義5 平和憲法の現状と可能性 | 島根大学 植松 健一 助教授 |
| | 講義6 戦争国家から平和国家の構築へ ～軍事的安全保障か, 人間的安全保障か～ | 山口大学 瀧瀬 厚 教授 |
| | 講義7 民族紛争はなぜ起きるのか | 徳島大学 餐場 和彦 助教授 |
| 8/11 | 講義8 環境と平和 | 愛媛大学 栗田 英幸 助教授 |
| | 講義9 人類の歴史と植物資源 | 高知大学 鮫島 一彦 教授 |
| | 講義10 宗教と平和 | 島根大学 山崎 亮 教授 |
| | 討 論 | |
| 8/12 | 講義11 紛争と健康(いのち) | 岡山大学 山本 秀樹 講 師 |
| | 講義12 自爆『テロ』と『反テロ』戦争 ～中東世界の現代的特性と共生の論理～ | 広島大学 吉村慎太郎 助教授 |
| | 試 験 | 各大学 |

授業の様子



講義：2・3 「鳥取大学での全学共通教育での平和講義の実践と課題」 鳥取大学 地域学部 一盛 真 助教授

平成16年度 鳥取大学公開講座「テニス教室」

平成16年度鳥取大学公開講座
とっとり県民カレッジ連携講座

テニス教室

教室日 9/12(日), 9/19(日), 9/23(木), 10/3(日),
10/10(日), 10/17(日), 10/24(日) {計7回}

時間 9時30分～12時30分まで
場所 鳥取大学テニスコート
※雨天の場合は変更することがあります

受講対象 市民一般 (初心者～上級者まで)
定員 30名 (先着順)
受講料 8,200円 (7回分)
※いったん納入された受講料はお返しできません
講師 清水 克哉 (鳥取大学 医学部 教授)

申込期間 平成16年8月2日(月)～8月31日(火)
※定員になり次第締め切りいたしますのでご了承ください。
※お電話でのお申込みの場合、月～金のAM8:30からPM5時の受付となります。

申込み先
鳥取大学 大学教育総合センター
〒680-8550 鳥取市湖山町南4-101 (学生部教育支援課共通教育係)

TEL: (0857) 31-6774
FAX: (0857) 31-6762
Mail: g010003@zim.tottori-u.ac.jp



テニス教室の様子



平成16年度 教養特別講義Ⅱ 『人生をいかに生きるか』

授業の目標及び概要

イラク戦争など激動する世界の中で、日本社会も高齢化や少子化などと連動した多くの難問に直面している現状である。そのような背景の中、この講義では、本学の学長や県知事をはじめとした学内外のトップ人から「人生」についての持論を語っていただき、「人生を考える」ための機会を提供しようとするものである。

| | |
|------|----------------------------|
| 期 間 | 平成16年10月4日(月)～平成17年2月7日(月) |
| 履修年次 | 1～4年次 |
| 主題科目 | 主題A(全学共通科目) |
| 単位数 | 2単位 |



「国際交流の時代」(11月8日)岩崎正美理事

授業計画

| 日 時 | 授 業 内 容 | 授 業 担 当 |
|--------|----------------------------------|--------------------|
| 10月4日 | 「ガイダンス」 | 清水 克哉大学教育総合センター長 |
| 10月25日 | 「一度だけの君の人生を」 | 道上 正規学長 |
| 11月1日 | 「脳死と臓器移植」 | 井藤 久雄医学部長 |
| 11月8日 | 「国際交流の時代」 | 岩崎 正美理事 |
| 11月15日 | 「感性教育への一つのアプローチ」 | 小山 裕史ワールドウィング代表取締役 |
| 11月22日 | 「自由を失わず」 | 片山 善博鳥取県知事 |
| 11月29日 | 「青年よ大志を抱け」 | 児島 祥悟(株)鳥取ガス代表取締役 |
| 12月6日 | 「熱き想い, 挑戦, 継続そして喜び」 | 重政 好弘理事 |
| 12月13日 | 「基礎医学—寄生虫学—の道を選択して」 | 平井 和光理事 |
| 12月20日 | 「科学技術立国・日本の役割」 | 中村 宗和副学長 |
| 1月17日 | 「高度情報化社会を生きる」 | 小林 一副学長 |
| 1月24日 | 「今はまだ人生を語らず」 | 永山 正男地域学部長 |
| 1月31日 | 「信頼性と品質保証の観点から」 | 副井 裕工学部長 |
| 2月1日 | 「Let's Try・・・まずやってみる, さあ挑戦してみよう」 | 本名 俊正農学部長 |
| 2月7日 | まとめ・テスト | 清水 克哉大学教育総合センター長 |

平成16年度 高年次実践科目 『現代の暮らしと金融・証券』 (野村証券株式会社提供講座)

期 間 平成16年10月6日(水)～平成17年2月2日(水)
履修年次 2年次以上
単 位 数 2単位
授業計画

| 日 時 | 授 業 内 容 | 授業担当(野村証券株式会社) |
|--------|-------------------|-------------------------|
| 10月6日 | 「ガイダンス」 | 米子支店 支店長 有田 廉 |
| 10月13日 | 「経済情報の据え方」 | 米子支店 CS課長 石塚 信章 |
| 10月20日 | 「経済成長と金融資本市場」 | 金融経済研究所 経済調査部 並木 富士男 |
| 10月27日 | 「証券投資のリスク・リターン」 | 投資情報部 次長 日塔 寿 |
| 11月10日 | 「日本セラミック 社長の話」 | 日本セラミック(株)代表取締役社長 谷口 義晴 |
| 11月17日 | 「債権市場の役割と投資の基礎知識」 | 米子支店 法人課長 荒井 則夫 |
| 11月24日 | 「債権市場の役割と投資の基礎知識」 | 米子支店 法人課長 荒井 則夫 |
| 12月1日 | 「株式市場の役割と投資の基礎知識」 | 米子支店 資産管理課長 小沼 一郎 |
| 12月8日 | 「株式市場の役割と投資の基礎知識」 | 米子支店 資産管理課長 壇野 祥一 |
| 12月15日 | 「投資信託の役割とその仕組み」 | 投資情報部 副理事 木村 哲也 |
| 1月12日 | 「ポートフォリオ・マネジメント」 | 投資情報部 次長 日塔 寿 |
| 1月19日 | 「資本市場における投資家心理」 | 米子支店 資産管理課長 壇野 祥一 |
| 1月26日 | 「資産運用とライフプランニング」 | 米子支店 FA課長 吉岡 信雄 |
| 2月7日 | 試験 | |



トピックス



ドイツ企業研修の報告

教育地域科学部人間文化課程('02入学) お ぐら しょう じ
小 棕 章 嗣

この夏、私はドイツでの企業研修に参加しました。これは栃木日独協会主催の、毎年、日本から大学生をドイツの企業や市役所へ送り込む、というものです。地域政策講座の平川先生が、この研修について教えてくださり、私も以前からドイツに興味があったので、これに参加してみることにしました。そして、東京まで面接を受けに行き、なんとか合格したので、この夏、ドイツで研修を行うことができたのです。

研修先はベルリン近くのHalle(ハレ)という街にある児童施設でした。このHalleという街は作曲家のヘンデルが生まれた街だそうです。研修の内容は「子供たちの遊びの準備や片付けをし、子供たちと一緒に話したり遊んだりする。そして、それらの活動を通して日本の文化を伝え、ドイツの文化を学ぶ。」というものでした。つまり、保育士・兼・日本文化の伝導師といった感じのものが私の仕事でした。

おそらく、日独協会に送った履歴書に、「『教育』地域科学部 人間『文化』課程」とあったので、教育関係の仕事に回され、かつ「ドイツは『文化』についても大丈夫だ」ということで、そのような仕事内容になったのだと思います。

正直、最初は「小学生(しかもドイツ人)は専門外なんですけど」といった感じでした。育った文化も違いますし、そもそも小学生と話すこと自体、私には困難なことなのです。そして、何よりも言葉の不安がありました。小学生くらいの子に、「英語で話して」というわけにもいきません。ですから、どうにかしてドイツ語で会話しないとイケませんでした。かといって、私のドイツ語も当然、完璧なものではありません。(今頃になって、もう少しドイツ語も頑張っておけばよかった、と後悔してしまいました)

そこで、職場の人とも相談し、とりあえず一緒に絵を描いたり、工作をすることにしました。理由はただ単に、あまり喋らなくてすみそうだから、でした。

一緒に絵を描く、という形で研修を始めましたが、まず、ドイツの子供の絵の上手さに驚かされました。どの子も水彩やアクリル、パステルを駆使して、植物や風景を巧みに描き上げていました。(おそらく、私が一番下手だったかもしれせん)そして、子供の絵にも国民性っ

て出るのかな、といったことを考えながら子どもたちの絵を眺めていたら、驚くべきもの描いていた子供がいました。なんと、「ドラゴンボール」の絵を描いている子供がいたのです。試しに、「ドラゴンボール」の絵を描いている子供に、「ドラゴンボール、好きなの？」と聞いてみたら、「うん。」と、答えてくれました。子供のほうはさらにドイツ語で話しかけてきたのですが、あまりにも早いドイツ語だったので、私にははっきりとはわかりませんでした。それでも、なんとなくわかったので、さらに話してみると、他にも「ベイブレード」や「遊戯王カード」といった日本の玩具が、ドイツの子供にも人気があることがわかりました。日本の玩具がドイツでも人気があるのは新鮮な感じでした。

次の日には、ある子供が実際に「ベイブレード」や「遊戯王カード」を持ってきてくれました。そこで、私も一緒にこれら日本の玩具で遊んでみたり、「日本での遊戯王カード」について話しました。話しているうちに、「やっぱり子供は日本もドイツも似たようなものだ」ということがわかり、なんとなく微笑ましかったです。研修内容にあった「日本の文化を伝える」というのも、サブカルチャー的な玩具についてでしたが、伝えることができたのではないのでしょうか。

もう一つの「ドイツの文化を学ぶ」というのも、順調にいったと思います。研修では直に子供たちに触れましたし、週に何回かは研修先の人とHalle市内を回りました。市内では古城や教会、博物館などにも行きました。これらの場所に行くごとに、研修先の人が色々な説明をしてくれました。

また、ホームステイ先でも、色々体験できました。家族の人たちと積極的に接したので、ごみ捨てやジャガイモの皮むき、買い物の荷物持ち、といった簡単な家事は私の仕事になりました。これらの家事のおかげで、「買い物するときには買い物袋を持っていくんだ」「ゴミ捨て場は鍵つきで、ゴミ箱は捨てるもので色が違うんだ」といった些細なことにも気づくことができました。まさに、身体でする経験＝体験、といった感じのホームステイでした。ホームステイと研修先の子供たちとの触れ合いによって、私なりにドイツ文化を学べたと思います。

そして、今回の研修で、私は何となく自信のようなものをもつことができました。最初は、本当に不安でした。「ドイツ語圏に一人でホームステイし、研修を受けるだなんて、無事にやり遂げられるのだろうか」といった不安で頭はいっぱいでした。しかし、実際にやってみれば、なんとかやり遂げることができました。無理かもしれないと思っていたことができたのです。「無理だと思っていたことができる」ということは「自分の限界を超えた」ということです。つまり、私は「今まで思っていたよりも自分は遠くを目指せるのではないか」といった自分への新たな期待を持つことができました。

ドイツでの体験は「やればなんとかなる」という自信と、「さらに遠くへ」という期待を私に与えてくれました。さすが、「教養小説の国」ドイツです。見事に若者の自己形成を手伝ってくれたのです。

絵を描く（２） 現場で風景を描く

今回は現場で風景画を描くことを取り上げてみよう。そもそも油彩による風景画のさきがけは、17Cのオランダの海岸の風車などを描いたロイスダールや並木道などを描いたホッペマなどで、市民達が力を得て自分達の肖像画や身近に見る風物を求める気風ができてからのようである。19Cになってイギリスでは田園風景を描いたコンスタブルや雨の中を走る汽車などを描いたターナーなどがあり、フランスでは一群の画家達が1830年代から40年代にバルビゾン村を訪れフォンテンプローの森で制作したようである。まさに森や沼と対峙した現場でイーゼルにキャンバスを立てて描いた。コンパクトにまとめられだした油絵の具セットの開発が丁度戸外で制作するのにも都合がよかったと思われる。そして1874年の第一回展からの印象派の時代には都会風景も含めて多くの画家達が現場で描くようにもなった。

私もイギリスの湖水地方での田園風景をスケッチもし、バルビゾンを訪れ画家達が泊まった宿の壁に走り書きされた油絵を見て、時を越えての親しみを憶えた。

今日の日本でもご存知のように、バルビゾン派や印象派のファンは多い。

翻って、我が鳥取でも、湖水地方やフォンテンプローの様な風景は多くあり、自然などの風景画を描く楽しみも沢山味わえる。

ここにあげた二枚の絵は、私が鳥大に着任の年と翌年に現場でイーゼルを立て、ライトレット（茶色）で下塗りをしたキャンバスに、前もって決めておいた場所に油絵の具セット持って行って描いた作品です。

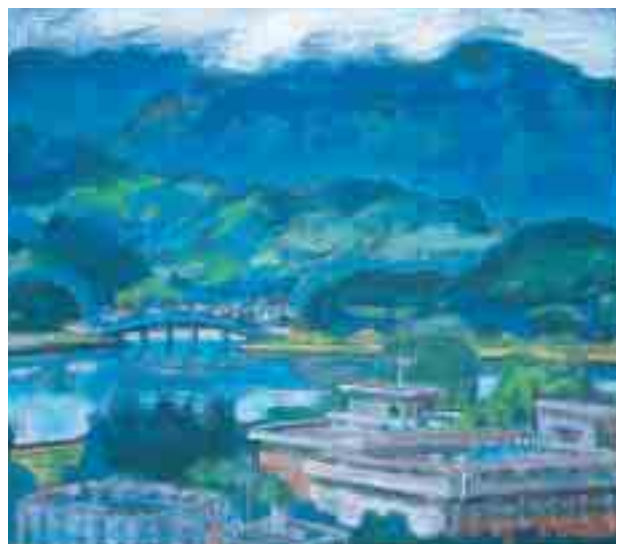
1、冬の湖山池越しの鳥大にロマンをこめて5時間で描いた。

2、今は入れない旧教育学部の時計塔の上階から、農学部越しに9月の湖山池と青島を2時間ずつ三日間で描いた。

（地域学部教授 上田敏和）



1) 1988年12月 湖山池より鳥大を望む F 8号 (38×45.5cm)



2) 1989年8月 鳥大からの青島遠望 F 10号 (45.5×53cm)

平成16年度 大学教育総合センター 職員構成

センター長 清水 克哉 (医学部教授)

センター主任 筏津 成一

センター主任 榊原 正明 (工学部教授)

センター主任 田畑 博敏

センター職員

教授 筏津 成一

教授 柳谷 保

教授 田畑 博敏

教授 渡邊 政憲

教授 福元 和行

助教授 武田 修志

助教授 後藤 和雄

助教授 松本 雅弘

助教授 サージアント トレバー

助教授 石川 雅雄

助教授 井上 順子

講師 武田 元有

講師 上野 耕平

講師 孫 淑華

講師 小林 昌博

センター事務

学生部 教育支援課 共通教育支援室

共通教育支援室長 北嶋 充

共通教育係長 原田 剛

係員 村上 啓

事務補佐員 森木 一美

事務補佐員 竹内 直子



『アゴラ』 鳥取大学大学教育総合センター広報 No.19

平成16年11月 発行

発行 鳥取大学 大学教育総合センター

〒680-8550 鳥取市湖山町南4丁目101番地

T E L 0857-31-6774 (大学教育総合センター)

F A X 0857-31-6762

E-mail g010003@zim.tottori-u.ac.jp

<http://www.stu.zim.tottori-u.ac.jp/center/index.html>